エフェソ 3:14-21「内なる人の力」

「こういうわけで、わたしは御父の前にひざまずいて祈ります。御父から、天と地にあるすべての家族がその名を与えられています。どうか、御父が、その豊かな栄光に従い、その霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強めて、信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住まわせ、あなたがたを愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者としてくださるように。また、あなたがたがすべての聖なる者たちと共に、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、人の知識をはるかに超えるこの愛を知るようになり、そしてついには、神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかり、それによって満たされるように。

　わたしたちの内に働く御力によって、わたしたちが求めたり、思ったりすることすべてを、はるかに超えてかなえることのできる方に、教会により、また、キリスト・イエスによって、栄光が世々限りなくありますように、アーメン」

幸せになりたい。これがわたしたちみんなの願いでありますけれども、幸せになる、ということ。幸せである、ということ。これはいったい、幸せを感じるわたしたちの能力に関わっているものであります。

マリア・カラスという、この人は 20 世紀最高のオペラ歌手と言われた人でありましたけれども、才能にも美貌にも機会にも名声にも財産にも恵まれたこの人が、その晩年は、お酒に溺れた、さみしい、幸の薄いものでありました。

毎週の街頭給食に来られる 83 歳の方がありまして、ドヤで生活している人でありますけれども、この人は「わたしはほんとうに幸せです。イエス様を信じて救われて、いつも感謝、感謝です」と証ししておられます。

人が幸せを感じるという、これはいったい、外側のものが整っているから幸せになるというものではない。才能があり美貌があり機会があり名声があり財産があって、なお幸せを感じることができないという、そういうことがある。その一方、仕事がない、お金がない、ドヤの生活である、しかも、感謝、感謝、わたしはほんとうに幸せですという、そういうことがある。

ですから、幸せであるというのは、外側の環境によるのではない。わたしたちの内なる能力。幸せを感じる内なる能力。内なる人の力。これに関わっているものであります。

さて、この幸せを感じる能力。これはまったく、自分を何者であると考えるかという、これにかかっております。わたしたちはいったい何者であるか。パウロは今日の聖書の箇所で「御父から、天と地にあるすべての家族がその名を与えられている」と言っています。これはすなわち、わたしたちのアイデンティティーは、神によって決定せられるべきものである、ということであります。

神が、わたしたちの存在の何であるかを根本的に決定したもう。神は、このわたしたちをイエスキリストによって救ってくださって、このわたしたちを神ご自身の子、わたしたちを神の子としてくださいます。エフェソ書 1 章 4 節に「天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです」と高らかに宣言せられております。父なる神は、わたしたちに向ってこうおっしゃる。「おまえはわたしの子だ。わたしはおまえを神の子として生んだ。わたしのすべてを、おまえに与えよう」　そう父なる神はおっしゃってくださる。ここに、この中にこそ、わたしたちの「何者であるか」が決定せられております。

わたしの収入は 250 万円である。わたしの身長は 153 センチである。わたしの体重は 82 キロである。わたしの顔にホクロが 24 個ある。わたしの視力は 0.04 である。わたしは五十肩で腕が上がらない。わたしは腰痛持ちであるという、そういうことどもでもって、この自分が決定せられてしまっている。どうにもならない。ついついわたしたちは、そういうふうに考えてしまいがちである。

でも、そうではない。わたしたちは自分を見るときに、天の御父をとおして自分を見るのでなければならない。わたしが何者であるか。父なる神がそれを決定していたもう。御父は言いたもう。「おまえはわたしの子だ。わたしはおまえを神の子として生んだ。わたしのすべてをおまえに与えよう」　そう父なる神

がおっしゃってくださる。ここへ、この中へ、わたしたちは自分が何者であるかを見なければならない。こうすることによって、わたしたちの幸せを感じる能力というものが、正しく調整せられてまいります。

さて、第二に、この幸せを感じる能力というものは、正しく調整せられるばかりでない。いよいよ大きく強くせられていくのであります。パウロが言っております。「御父が、その豊かな栄光に従い、その霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強めて、信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住まわせてくださるように」　幸せを感じる能力、わたしたちの内なる人、内なる人の力というものが、いよいよ豊かにされ、いよいよ強くされる、というんであります。

幸せを感じる能力という、これがどういうふうに大きく強くせられていくんであろうか。神の豊かな栄光に従って、強く大きくせられるというんであります。神の豊かな栄光というのは、主イエスキリストが十字架におかかりになったが三日目に復活して勝利なすったという、その栄光であります。十字架と復活という、ここにほとんど無限とも言うべき神の栄光の豊かさがございます。なぜというに、十字架、この裏切られ、重荷を負わされ、追い詰められ、立場を失い、メンツを失い、力を失い、命までも失うという、この十字架が、そのまま復活に直結していて、ぜんぶを勝利に、ぜんぶを永遠の命に、一瞬のうちに転換してしまうからであります。ここに、わたしたちの人生におけるマイナスを全部プラスに転換してしまうという、神の栄光の豊かさがございます。

ここでわたしたちは、あのドヤで生活している83歳の兄弟のことを思い出さなきゃならない。年をとっているんだという、お金がないんだという、ドヤの生活であるという、はたから見たらマイナスにしか見えないことが、主イエスキリストの十字架と復活の力を知っているから、全部プラスに転換せられている。だから、あの兄弟の口から出るのは、「感謝、感謝、感謝です」という言葉だけであるのです。

人生におけるマイナスを全部プラスに転換してしまう、主イエスキリストの十字架と復活の力。これによりすがるとき、わたしたちの器が大きくせられてま

いります。わたしたちの内なる人が、強く大きくせられてまいります。そうしてついには、わたしたちの内に主イエスキリストご自身が、まったく満ちてくださるようになるのであります。すなわちパウロが「あなたがたの内なる人を強めて、信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住まわせてくださるように」という、これであります。

いったい、わたしたちのうちにキリストが住んでくだされば住んでくださるほど、人を愛するというわたしたちの能力が増し加えられてまいります。実に神の愛がすがたかたちをとって現れたものがキリストでありますから、神の愛が人となったのがキリストですから、このキリストがわたしたちのうちに住んでくださるほど、人を愛するわたしたちの能力が増し加えられるのであります。

実に主イエスキリストは、その最後の晩餐において、こう言われております。ヨハネによる福音書の第 13 章 1 節に、「イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」とある。この愛餐の食事の席に一緒に着いていた弟子の一人がイスカリオテのユダでありまして、これが主イエスを裏切るのであります。この者はこれからわたしを裏切って、それがためにわたしは十字架につけられることになるという、主イエスは全部それをお見通しの上で、裏切り者の弟子と愛餐の食事を一緒になさった。7 を 70 倍するまで赦せという愛が、そのままかたちとなって現れたイエスキリストは、まさに愛の化身でありまして、その愛たるや、わたしたちの理解を超えております。

で、わたしたちの内なる人が、どんどん強くせられ、どんどん大きくせられて行った先に、人を愛するわたしたちの能力は、これほどまでに増し加えられるのだという。キリストがわたしたちの内に満ちてくださるなら、わたしたちは、キリストのごとく愛するようになるというのです。

もっとも、わたしたちは一朝一夕にそこまで行くものではありません。わたしたちは、自分の内なる人がキリストによって拡張せられて、だんだん愛の分量が多くせられていくよう、成長していくことになります。

この愛は、だんだん成長せられて行って、ついには、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さを、とらえるまでになります。

キリストの愛が広いという。どんな人をも分け隔てなく愛し接するという、そういう広さでありまして、相手がアメリカ人だからこうする、とか、相手が中国人だからどうする、とか、相手が日本人だからこうだ、とか、そういう分け隔てがまったくありません。だれでも兄弟姉妹として遇するという、そこへ、そこまで、わたしたちは成長せられてまいります。

キリストの愛が長いという。どれだけ長くかかってもじっと待ち続けるという、そういう愛の長さでありまして、5 分待ってもう我慢がならないとか、一ヶ月待って返事がないから諦めるとか、三年努力してみて無駄骨だったから腹を立てるとか、そういうものではありません。主イエスキリストが、わたしたちをどれだけ忍耐深く待っていたもうことか。20 年待つ、50 年待つ、100 年待つ、というどころでありません。実に主イエスキリストは、人が悔い改めて帰ってくるのを 2000 年間じっと待ちたもう。そこへ、そこまで、わたしたちは成長せられてまいります。

キリストの愛が高いという。キリストは天に上げられ、神の右に座したまいて、父なる神様に直接わたしたちのことを執り成していたまいます。わたしたちがイエスの名によって祈り求めることは、なんでもすべてイエス様が父なる神様のお耳に直接入れてくださる。そういうわけですから、父なる神様は、「これはわたしの愛す独り子が言うことなんだから、この子に免じて聞き入れてあげよう」と思ってくださる。こういうわけで、イエスの名で求めたことは、すべて与えられるという。そこへ、そこまで、わたしたちは成長せられてまいります。

キリストの愛が深いという。キリストは死んで陰府に下りたまいました。この世で一番低い場所、この世で一番暗い場所、この世で希望も夢も光も何も無いところ。死んだ人しかいないところ。そこが地下深い陰府でありまして、キリストの愛は実にこの陰府の底の底にまで到達しております。それゆえ、わたしたちの人生の経験において、キリストの愛が触れ得ない場所、キリストの愛が届き得ない場所は、ひとつもないということである。低さの極み、暗さの極み、

絶望、失望、暗闇の極み、そこへすべて、キリストの愛が到達しております。「ここだ、ここに、わたしが一緒にいるよ」とキリストがおっしゃってくださる。墓の穴の中、墓石の扉の彼方にすら、キリストの愛が到達しております。「ここだ、ここに、わたしが一緒にいるよ」とキリストがおっしゃってくださる。キリストは言いたまいました。「見よ、わたしは世の終わりまで、あなたがたといつも共にいる」　そこへ、そこまで、わたしたちは成長せられてまいります。

かくして、わたしたちは幸せな者となります。わたしたちは最も幸せな者となります。わたしたちの幸せを感じる能力というものが、宇宙大のキリストの愛の大きさにまで拡張せられ成長せられてまいります。こうしてわたしたちは、パウロが言うごとく、「人の知識をはるかに超えるこの愛を知るようになり、ついには、神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかり、それによって満たされるようになる」のであります。

どうか、わたしたちの幸せを感じる能力を、ここまで、この「神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかる」という、ここまで、大きくさせていただきましょう。

そのためには、第一、わたしたちは自分を見るときに、天の御父を通して自分を見るようにいたしましょう。自分のアイデンティティーを決定しているのは、自分ではない。外部の環境でない。天の御父であります。天の御父の愛が、わたしたちの「何者であるか」を決定しております。
第二に、十字架と復活の力を知ることによって、わたしたちの内なる人を強めていただきましょう。人生のすべてのマイナスをイエスキリストにおいてすべてプラスに転換する、十字架と復活の力。これこそが神の豊かな栄光の力であります。十字架と復活の力にあずかりましょう。
第三に、信じ、信じて、信じ続けましょう。キリストがわたしたちのうちに満ち満ちてくださって、それに応じて、人を愛するわたしたちの能力が大きくせられて行って、ついにキリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さにまで大きくせられるという、わたしたちはこれを信じて、進んでまいりましょう。

最後に、パウロが祈りました祝福の祈りを、わたしたちのための祈りとして祈

ります。「わたしたちの内に働く御力によって、わたしたちが求めたり、思ったりすることすべてを、はるかに超えてかなえることのおできになる方に、教会により、また、キリスト・イエスによって、栄光が世々限りなくありますように、アーメン」